氏　　名	于　増輝
学　　位	博士（日本言語文化学）
学 位 記 番 号	博甲第 104 号
学位授与年月日	2013 年 3 月 22 日
審 査 研 究 科	外国語学研究科
論　文　題　目	近世日本語における唐話受容の研究 ―漢文小説、唐話辞書及び読本類を中心に―
論文審査委員	（主査）大 東 文 化 大 学 教 授　寺 村　政 男 （副査）大 東 文 化 大 学 教 授　蔵 中 し の ぶ （副査）大 東 文 化 大 学 教 授　丁　　鋒 （副査）群馬県立女子大学教授　安 保　博 史

于増輝　博士論文　審査報告

于増輝氏履歴

平成 17 年 7 月中国・魯東大学外国語学部日本語学科卒業、

平成 17 年 9 月中国・山東師範大学日本言語文化学専攻修士課程入学に入学、同校を修了

平成 20 年 8 月中国・山東政法学院日本語学部専任講師

平成 22 年 3 月中国・山東政法学院日本語学部専任講師　　（一時休職　現在に至る）

平成 22 年 4 月大東文化大学大学院外国語学研究科日本言語文化学専攻博士課後期課程入学

平成 23 年 4 月文部科学省国費留学奨学生となる。

現在

平成 24 年 10 月大東文化大学大学院外国語学研究科日本言語文化学専攻博士課程後期課程 3 年生

以上の経歴を経て、平成 22 年 4 月大東文化大学大学院日本言語文化学専攻博士課程後期課程入学後以下の論文を執した。

論文（ゴチは学会査読有）

1.「中日言語におけるテクストの結束性について―パラグラフの統一性を中心に―」

（『語学教育研究論叢』第 28 号　大東文化大学語学教育研究所　2011 年 2 月）

2.「中日言語におけるパラグラフの語彙的統一性について」

（『外国語学会誌』第 40 号　大東文化大学外国語学会　2011 年 3 月）

3.「江戸時代の『水滸伝』の注釈書類について」

（『指向』第 8 号大東文化大学大学院外国語学研究科日本言語文化学専攻誌　2011 年 3 月）

4.「『南総里見八犬伝』に見られる白話語彙攷」

（『外国語学会誌』第 41 号　大東文化大学外国語学会　2012 年 3 月）

5.「『海外奇談』における漢語攷—傍訳を手掛かりとして—」

（『語学教育研究論叢』第 29 号大東文化大学語学教育研究所　2012 年 3 月）

6.「『海外奇談』における漢語攷（二）—傍訳を手掛かりとして—」

（『外国語学研究』第 13 号　大東文化大学大学院外国語学研究科　2012 月 3 月）

7.「江戸時代における中国白話語彙の流入とその受容」

（『指向』第 9 号大東文化大学大学院外国語学研究科日本言語文化学専攻誌　2012 年 3 月）

8.「『海外奇談』における漢語再攷—傍訳を手掛かりとして—」

（『水門—言葉と歴史—』第 24 号　勉誠出版　2012 年 9 月）

9.「『南総里見八犬伝』における白話語彙研究」

（『日本語学科 20 周年記念論集』　大東文化大学　2013 年 2 月刊行）

10.「日本における『水滸伝』に関する唐話辞書—『水滸伝譯解』、『忠義水滸伝鈔譯』を中心に—」

（『語学教育研究論叢』第 30 号　大東文化大学語学教育研究所　2013 年 3 月刊行予定）

11.「日本における『水滸伝』に関する唐話辞書—『水滸伝譯解』、『忠義水滸伝鈔譯』を中心に其の二—」

（『外国語学会誌』第 42 号　大東文化大学外国語学会　2013 年 3 月刊行予定）

12.「『海外奇談』における漢語攷—唐話辞書における解釈を中心に—」

（『外国語学研究』第 14 号　大東文化大学大学院外国語学研究科　2013 年 3 月刊行予定）

口頭発表（ゴチは国際学会）

1.「『海外奇談』における漢語攷—傍訳を手掛かりとして—」

（水門東京例会　2011 年 10 月 2 日　於大東文化会館）

2.「『海外奇談』における漢語攷（二）—傍訳を手掛かりとして—」

（第三回「東西文化の融合」国際シンポジウム　2011 年 11 月 6 日　於大東文化会館）

3.「『海外奇談』における漢語再攷—傍訳を手掛かりとして—」

（水門東京例会　2012 年 3 月 31 日　於首都大学東京）

4.「『水滸伝』に関する唐話辞書—『水滸伝譯解』、『忠義水滸伝鈔譯』を中心に—」

（第四回「東西文化の融合」国際シンポジウム　2012 年 6 月 17 日　於大東文化会館）

上記 12 本の論文および口頭発表を基にして博士請求論文である「近世日本語における唐話受容の研究—漢文小説、唐話辞書及び読本類を中心に—」を提出した。

本博士論文の構成

本論文は以下の四章十二節、序章、終章及び附表で構成されている。

序章

第一章　近世日本語における白話語彙の流入と受容

第 1 節　先行研究

第 2 節　日本語への白話語彙の流入

第 3 節　日本語における白話語彙の受容及び展開

第二章　漢文小説『海外奇談』における漢語攷—傍訳を手掛かりとして—

第 1 節　研究対象と先行研究

第 2 節　意味から傍訳に対する考察

第 3 節　漢語の音読みにより別の漢語に別の解釈語彙を付けているもの

第三章　日本における『水滸伝』に関する唐話辞書—『水滸伝譯解』、『忠義水滸伝鈔譯』を中心に—

第 1 節　研究対象と先行研究

第 2 節　両辞書における解釈に関する考察

第 3 節　取り上げられた語彙の他の水滸辞書における解釈

第四章　水滸語彙の日本語における受容と展開

第 1 節　日本漢文小説『海外奇談』における使用状況

第 2 節　『雨月物語』における使用状況

第 3 節　『南総里見八犬伝』における使用状況

終章

附表

評価

漢語の日本語への流入は『四書五経』などの資料を中心とした上古漢語（漢代以前）は相当早い時期に日本語の中に流入していたと考えられるが、漢語口頭語語彙の日本語への流入はほぼ 3 期に分つことができる、第 1 期は奈良初期～平安初期の中古漢語語彙（六朝、隋唐）の流入、仏典類を中心として、韻書特に類『唐韻』、『遊仙窟』や『漢語抄』、『楊氏漢語抄』、『弁色立成』など日本人の手になる漢語字書の作成、それらは現在散逸しているが『倭名類聚抄』に引用されて残存する。また空海のように難解な六朝の文学理論を十分に理解し日本に伝えるだけの語学力を有する人材も多くいた。のちに空海は現存する最古の字書『篆隷万象名義』を作る。和訓を付けた『新撰字鏡』などもこの時期に作られる。第 2 期は平安末～鎌倉期の早期近世漢語語彙（宋、元）の流入、日宋貿易よる宋との交流や思想面では禅宗の伝来により禅宗典籍である『禅語録』の解読、『禅語録』は『朱氏語類』などにも影響したせいか同種などにも口頭語彙は多い。第 3 期の江戸期は、中晩期近世漢語（明代から清代）の流入である。唐通事の著作『唐話辞書』類や明代、清代の口頭語傾斜の強い小説の流入、それらが江戸文学の読み本類などに大きな影響を与えた。本論考は第 3 期を中心に取り扱っている。論考は日中比較語彙論とも言うべき視点を中心にして緻密な論を展開している。

序章では本論考の目的、先行研究を明らかにし、各章へ論考を進めている。ともすれば先行研究は形式的なものになりがちであるが、本博士論文では詳細に調査されており、充分に当該研究の「研究資料要覧」ともいえるものである。于氏の真摯な研究姿勢が如実に表れているといえよう。

以下第一章より各章ごとに見てゆく。

第一章は以下の三節より構成されている。

第 1 節　先行研究

第 2 節　日本語への白話語彙の流入

第 3 節　日本語における白話語彙の受容及び展開

本章の概略

本章は近世日本語における白話語彙の流入、即ち「唐話」の日本における受容と展開について論じている。即ち近世漢語口頭語彙の日本語への流入を取り扱ったものである。

第 1 節は先行研究を詳細に考察したうえで、白話語彙の流入は主として唐通事の活動と白話小説類の日本への渡来によるものであると問題提起している。

第 2 節は上記二つの面を巡って、具体的に唐通事の定義、唐通事の活動、特に『水滸伝』の日本への渡来の状況を考察している。また、『水滸伝』については、その成立、日中における版本研究も加えて論証している。特に『水滸伝』の版本書誌は複雑で中国文学の方面からみても、解決できていない面が多いが、于氏は日中双方の研究成果を丁寧に考証し、的確な判断を下していると言える。

第 3 節は日本漢文小説、通俗書、唐話辞書、読本、唐話学の流行、訓訳という六つの面から白話語彙の日本語への受容状況とその展開を論じている。

この三節を通して、マクロの面から、日本近世語における白話語彙の流入、受容と展開の概観を把握できる。今後の課題としては、従来から、あまり指摘されていないが黄檗禅と唐話の関係についても、研究を進めて行く事が本研究をより深めると考えられる。

第二章は以下の三節より構成されている。

第 1 節　研究対象と先行研究

第 2 節　意味から傍訳に対する考察

第 3 節　漢語の音読みにより別の漢語に別の解釈語彙を付けているもの（例、放心：アンシン→漢語の「ほうしん」は別の意味）

本章の概略

第 1 節は『海外奇談』の成立、版本及び先行研究を論じている。

第 2 節は『海外奇談』における漢語、傍訳を手掛かりとして、『小説字彙』（以下『字彙』と略す）、『怯里馬赤』（以下『怯』と略す、ちなみに怯里馬赤は Mongol 語の kelemürči・

通訳の意）における解釈と比較しながら、中国近世漢語の意味とずれる傍訳を考察している。中国近世漢語の意味とずれる傍訳について、直訳ではなく、文脈に合わせた意味で、而も日本文化と繋がっている部分もあると思われる語例、中国近世漢語の知識を持ちながら、十全には理解できなく、誤訳だと思われる語例、中国近世漢語と意味がずれる部分はあるが、文脈に即し、而も『字彙』の解釈と意味が同じながら、通常とは相違する訳語を付した語例、中国文献において、このような使い方はないが、漢字の意味から理解できないことがない語例という四つの面から全部で二十七例に分析を加えている。その誤用の原因として、『字彙』か『怯』からの引用によるものか、作者によって派生された使い方によるものか、ほかの文献、辞書を参照したによるものかのどちらかと考えられると言う。また、『字彙』か『怯』に確認できる語例を含めて、取り上げられた意味がずれると思われる語彙を他の唐話辞書における解釈も考察している。

第 3 節は漢語の音読みにより別の漢語を解釈する語彙を考察した。漢語の音読みにより別の漢語を解釈している語彙を分析し、「分別」（随口説的話→分別なき話）、「推量」（體量→すいりやうする）、「意見」（苦勧→意見する）、「離別」（休退→りべつする）、「自身」（親身→じしん）、「安心」（放心→あんしん）、「儀式」（排式→ぎしき）、「指南」（指教→しなん）、などを用いて、それぞれ対応する『奇談』の原文の漢語語彙に分析を加えている。『奇談』が成立された当時に日本語に定着された漢語語彙の一端が窺えると結論付けている。具体的な指摘は納得性を持つ。

第三章は以下の三節より構成されている。

第 1 節　研究対象と先行研究

第 2 節　両辞書における解釈に関する考察

第 3 節　取り上げられた語彙の他の水滸辞書における解釈

本章の概略

第 1 節は日本における『水滸伝』に関する唐話辞書の総体紹介、先行研究及び『水滸伝譯解』（以下『譯解』とする）、『忠義水滸伝鈔譯』（以下『鈔譯』とする）の作者などを論じている。

第 2 節は『譯解』、『鈔譯』という二種類の水滸辞書を巡って、中国近世漢語の意味とず

れると思われる解釈を 61 例分析した。その誤用した原因としては、これらの辞書はそれぞれに編纂者の読解の理解程度と、『水滸伝』の物語の内容について事柄的な注解を用い、白話小説翻訳の具体的な訳法、白話語彙の読解程度と記述態度によるのではないかと指摘している。

『譯解』より成立年代が 40 年間ぐらい遅れる『鈔譯』が編纂された時、『譯解』を参照したかという問題についても考察している。同じ見出し語に対して、両辞書の解釈は言い回しが違うが、『鈔譯』における「帰俗」の一例の中で、『譯解』の内容を言及しているので、『鈔譯』の編者は『譯解』を参照したことが分かると分析している。例の提示が少ないので、今後の用例を豊富に見つけることが求められる。

第 3 節は取り上げられた語例を他の水滸辞書における解釈を調査している。各節とも下している判断は妥当なものと考えられる。

第四章は以下の三節より構成されている。

第 1 節　日本漢文小説『海外奇談』における使用状況

第 2 節　『雨月物語』における使用状況

第 3 節　『南総里見八犬伝』における使用状況

本章の概略

本章は『海外奇談』、『雨月物語』、『南総里八犬伝』における『水滸伝』にも確認できる白話語彙を比較考察した。

第 1 節は『奇談』における『水滸伝』と共有する白話語彙を考察し、合計 62 例を確認している。上記語彙は『奇談』における語例の殆どは意味も『水滸伝』と一致するが、「連珠箭的苦難」、「漆(ママ)穿鴈嘴鉤搭魚腮」、「欺負」、「不合」、「装做愰子」、「爭些兒」、「壁廂」、「這般田地」、「兜搭」の使い方は中国近世漢語とずれがあると思われる（具体的な内容は第四章第一節 1.2 を参照されたい）。また、『奇談』は『字彙』を引用したとされるが、分析した結果 62 例のうち、24 例は『字彙』に確認できないとする。従って、『奇談』の作者は『字彙』のみならず『水滸辞書類』も参照したのではないかと推測している。

第 2 節は『雨月物語』（以下『雨月』と略称する）における『水滸伝』に共通する白話語彙を考察し、合計 19 例を確認している。

和語の代わりに白話語彙を導入された背景及び理由として、江戸時代に入ると、唐話学が次第に盛んになっていた。明清期に勃興していた口頭語は日本人にとっても、新鮮な興味を引いたと思われる。また、白話語彙を取り込もうとしたもう一つの理由は、当時の人々は自分自身の唐話力を示そうとする面を指摘している。

『雨月』各篇の典拠は先行研究から、『雨月』の九篇の内、中国の白話小説の影響下にあると考えられる作品は、「菊花」、「夢」、「浅」、「蛇」であり、「青」は『水滸伝』中の語彙を多く引用したことが分かるとする。取り上げられた十九例の使用回数と出典を考察すると、白話語彙の使用が最も多いのは「蛇」で六ヶ所、続いては「菊」で五カ所、「浅」で五カ所、「青」で四カ所である。興味深いことに、「青」は『水滸伝』を引用したと言われ、「青」における四カ所の白話語彙「連忙」、「斎糧」、「禿驢」、「活佛」は確かに水滸語彙の中に特徴のある語彙であると言ってもいいと思われると結論付けている。「夢」は中国白話小説の模倣であるにも関わらず、考察した語彙の中にこの作品に使われた例が少ないことも指摘している。中国白話語彙の正確的な使用、作者の唐話の高いレベルといった語彙面で再評価すべきではないかと思われると結論付けている点は、新たな視点として評価できる。

第 3 節は『南総里見八犬伝』（以下『八犬伝』と略称）における『水滸伝』にも確認できる白話語彙を考察し、合計 146 例を確認している。

この 146 例の分析結果として、殆どは意味的には『水滸伝』中の語義と一致していると指摘する。その結果、大作である『八犬伝』を創作した馬琴の唐話レベルが高いことは窺えるとする。このうちで、「夥計」、「火家」、「肢嗒」は中国近世漢語と少しずれがあるとする。『八犬伝』では、「夥計」、「火家」は「なかま」と振っているが、中国近世漢語の意味は「手代」が適訳である。また、「肢嗒」は「ふくよか」と付したが、中国近世漢語の意味は「ごつごつ」の意味であるとする。見解は概ね妥当と考えられるが、清代漢語方言的要素を加えれば、なお妥当性を高められる。今後の研究の進展に期待したい。

また、『八犬伝』における『水滸伝』にも確認できる白話語彙について、『水滸伝』の原文と照らし合わせたところ、これらの白話語彙は『水滸伝』の前二十回に集中することが分かった。『忠義』は『水滸伝』の一回から十六回までの注釈書であり、これらの白話語彙は『忠義』に確認できるものが多く、傍訓が『忠義』解釈と一致するか殆ど一致するもの

も多いので、作者は『忠義』を参照したのではないかと指摘している。

『八犬伝』は『水滸伝』の内容を借りて、武器、武術の記述、戦場、敵を図るために仮装すること、水戦、戦争と幻術、怪談の多い事、仮装して、刑場に乱れ入り、人を救う趣向などは『水滸伝』と密接な関係があると先学に指摘されているが、『八犬伝』はこれらの場面を描写した時、「撲地」、「法度」、「打扮」、「法場」、「結果」、「土兵」、「朴刀」、「小嘍囉」、「緝捕」、「圏套」などこれらの場面と関連する語彙を直接利用したことが分かる。また、『八犬伝』は『水滸伝』と同じように、忠臣、孝子、貞婦の行いは報いられ、佞臣、姦夫、毒婦の行いは罰される儒教的道徳に基づいた勧善懲悪の物語であるから、この面の言葉、例えば、「賊男女」、「筭計」、「強人」、「剪径」、「性起」、「歹人」などを多用したことが分かると指摘している。

附表の意義

現在、公開される江戸時代の唐話辞書に関する語彙データベースはまだないようである。漢文小説である『海外奇談』、白話語彙の辞書である『小説字彙』、『怯里馬赤』、『水滸伝』に関する主な注釈書『水滸伝譯解』、『忠義水滸伝鈔譯』を対象にし、白話語彙とその相応する解釈（採用されない語彙もある）を抜き出し、データベースにして、当時の白話語彙受容の一端を窺えるだけでなく、唐話受容研究の便利な道具にもなると思われる。また、データ作りという基礎作業を通して、研究の土台が作られるだけでなく、根拠として、オリジナル性と研究の切り口を探し出すことにも繋がっていると考えられる。その観点から見て本附表の価値は高いと考えられる。

３．結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（日本言語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。